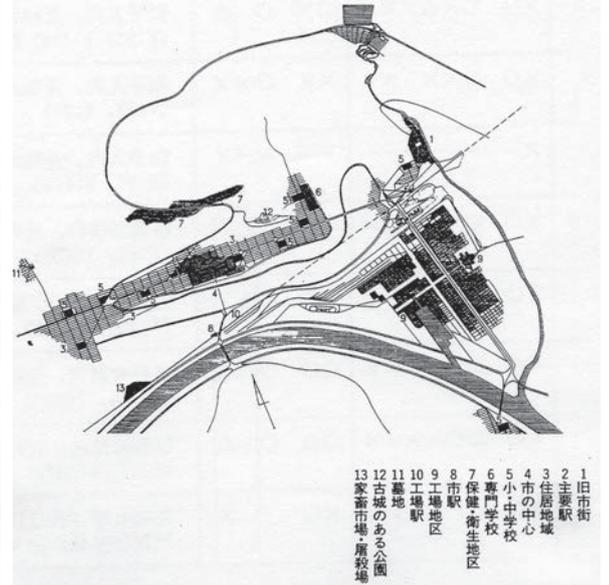


# 機能主義都市からの脱却に向けて 一時間・空間コンテクスチャリズム

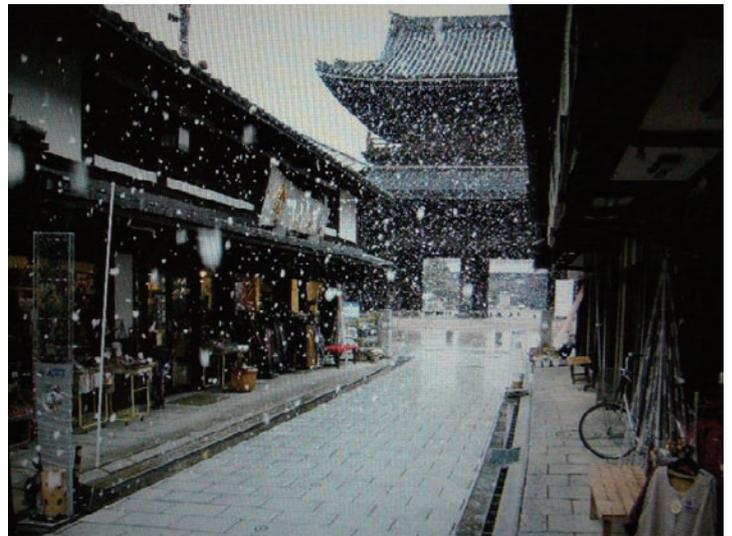
KS  
DP 関西大学  
戦略的研究基盤  
編  
団 地 再  
リ ー フ レ ッ ト  
Re-DANCHI leaflet

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業  
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

MARCH 2014  
VOL. 141



トニ・ガルニエの「工業都市」<sup>1)2)</sup>



城下町長浜の対称的都市デザイン（左）／大通寺へ向かう景観軸（右）<sup>3)</sup>

## はじめに

20 世紀は機能主義の時代であった。機能主義をもとに多くの都市は発展した。交通や設備などのインフラを機能的に整備し、鉄骨やコンクリートを用いた新たな建築形態を生み出した。機能主義が 20 世紀に与えた功績は大きい。しかしその一方で、歴史や文化を軽視し、街並みや都市の景観を壊してきたという側面もある。我々が機能主義を越えて、歴史や文化を尊重し、街並みや都市の景観を魅力的に変えるような手法や考えを過去の歴史や文化から再解釈し、新たに発展させる必要があるのではないだろうか。

コンテクスチャリズムとは、20 世紀を通じて支配

的でありつづけた機能主義に対し、その思想・方法論の改変を求めるものである。コンテクスチャリズムは 21 世紀にこそ発展すべきものと山崎氏は考えている。これまで考えられてきた、建築を「美」・「用」・「強」の 3 つの要素だけで語るのではなく、空間的コンテクストである「社会性」、時間的コンテクストである「歴史性」、そして「地球環境保護」にも考慮して考えることで、21 世紀の新たな建築としての考えを提示できるのではないか。

本稿では、機能主義がもたらした功罪について整理するとともに、機能主義から脱却した都市計画のあり方、成熟した都市に向けた仕組みづくりについて考察する。

## 2. 機能主義の功罪

機能主義は、建築や都市に対して様々な課題を残しているが、産業革命後の世界が機能主義によって大きく変化したことを忘れてはならない。

まずは、機能主義がもたらした功罪について整理する。

### ○機能主義のもたらした功績

機能主義のもたらした功績については、

- ・機能主義理論にもとづく新建築を形態として示した。
- ・衛生的で機能的な環境の一形態を示した。
- ・20世紀の工業と資本主義社会の要請にこたえる建築を提供した。
- ・鉄骨造と鉄筋コンクリート造に形態を与えた（柱梁構造としての形態開発）。
- ・建築の民主化を実現した（安価に早く建設できる建築）。

以上の点をあげることができ、現代の衛生的で機能的な都市を形成するための大きな利益を生み出したと言える。

### ○機能主義の罪

しかし、それらの利益と引き換えに、その土地の持つ歴史性や空間性を無視してきたという罪も大きい。

- ・単一敷地主義的設計。
- ・都市を自由な個の集合体と捉えず全体主義的都市を提言した。
- ・自然科学主義（普遍主義）、国際建築で世界を埋めようとした。
- ・地域文化の否定。

これらの要因こそ、景観を均質で多様性のないものにした根源であると言える。さらにまた、

- ・歴史文化を否定し、人間味ある歴史都市を否定した。
- ・CIAMのアテネ憲章で、都市における歴史的区域を保護すべきとしたが、近代建築は歴史的建築と調和をはかるといふ思想がない。
- ・近代建築 VS 歴史建築＝開発と保存の対立思想を生んだ。

このように、歴史・文化の保存に関しては、保存する区域と、開発する区域をはっきりと線引きしてしまっているとも言える。

## 3. ル・コルビュジェにみる機能主義の発展

ル・コルビュジェの作品、思想から、彼の用いた手法を考察することで、どのように機能主義的理論を抽出し、その後に影響を与えてきたかを以下に示す。

### ○歴史的デザインの逆転

RCを用いた柱梁構造が普及したことで、ヴォリュームを浮かし（ピロティ）、横長の窓を設計することが可能となった（図1）。これまで、組積造では不可能であったデザインをRC造によって実現している。また都市デザインについても、街路に面して建物が並ぶというこれまでのデザインを逆転し、街区の真ん中に建物が建つ都市構成を提唱した。

以上のように、コルビュジェが用いた手法は、単なる歴史的デザインに対する裏返しであり、実際の都市の豊かさを意識したものとして考えていなかったのではないだろうか。

パリ・ヴォワザン計画でも、計画地は敷地を何も無い状態から開発しているのに対し、セーヌ川を挟んだ対岸は手を付けずに完全に保存して



図1. サヴォア邸<sup>4)</sup>

いる（図2）。

### ○ル・コルビュジェの思想の原点

・ロバート・オーウェンの提唱した「理想都市」では、既存の都市に見切りをつけ、新都市を緑地の中に計



図2. パリ・ヴォワザン計画<sup>5)</sup>

画されている（図3）。これはル・コルビュジェの300万人の都市などに引き継がれる。

・F.C.N. フーリエの「ファランステール」



図3. オーウェンの「理想都市」<sup>6)</sup>

ル」では、一階を馬小屋や倉庫として利用し、住居として利用しない西洋の伝統的構成を応用し、一階部分をピロティとしている。そのジグザグの形態はヴォアザン計画で配置される集合住宅の形態に継承されている（図4）。

・トニ・ガルニエの「工業都市」からは、都市を機能ごとにゾーニングする手法や、コンクリートを多用した造形に、コルビュジェだけではなく

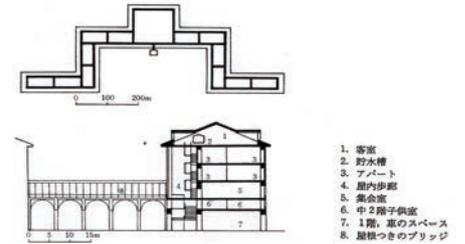


図4. フーリエの「ファランステール」<sup>7)</sup>

い機能主義全体へ影響を与えていることが分かる（図5）。

## 4. 時間・空間コンテクスチャリズム

ここからは、現代の建築設計を考える上では当然のことかもしれない

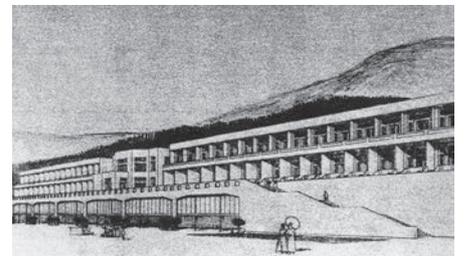


図5. トニ・ガルニエの「工業都市」(保養所)<sup>8)</sup>

ル・コルビュジェによるパリのためのヴォワザン計画：既存の都市を白紙にして新たに描き直している。

が、コンテキスト（脈絡のようなもの）を取り込んだ設計手法について提案を行う。

### ○場所のデザイン

設計・計画を考える際、機能性も設計上考慮して考えつつ、特に歴史と空間について、そのコンテキストを深く読み込むことが必要であると考えている。それを場所のデザインと呼ぶことが出来るだろう。

### ○対立概念の連続性

「保存」と「開発」のように、対立する概念は、両者の比率を漸次変化させつつ、連続的につながっている、と言える。「完全な保存＝100% 全ての保存」、「完全な開発＝100% 新規形態の創造」という対立する方法ではなく、「80% 新規形態の創造・20% 保存」、「50% 新規形態の創造・50% 保存」といったような、その場所に合わせて比率を変える方法が考えられる。

図6のように設計・計画行為の場において、通時的文脈としての歴史をどのように解釈するか、ということが重要である。これまでの機能主義では、歴史を無視しており、逆に歴史に配慮するときには、完全な保存の道しかなかった。また、共時的文脈として、周辺環境に対する解釈を求めたい。現代の空間における

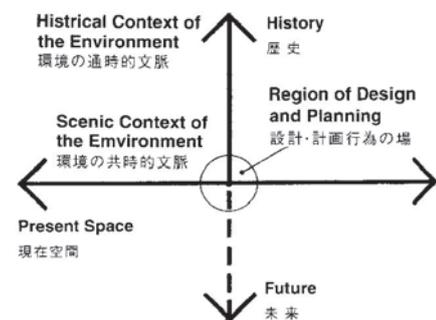


図6. 時間・空間コンテクスチャリズム



図7. 保全・創造の連続的関係（遷移的対立概念）

周辺との調和、連続性に配慮することで、その都市の景観が担保される。この歴史、環境をどれだけ取り込むかという取捨選択は設計者が責任を持って決定していく。

図7は、ある場所（場所A）での設計行為が、保存と開発の対立概念をどの比率で考えるかという事を示している。歴史と環境に配慮した場合、場所Aの位置は中間付近に位置することが多く、極端にどちらかに触れるという事は考えにくい。

時間・空間コンテクスチャリズムは、建築の美・用・強に「歴史文化性」と「社会性」をプラスする設計手法を用いることにより、機能主義からの脱却を目指している。

### 5. 財産権の再考へ

時間・空間コンテクスチャリズムのほかに日本人が都市を考えていく上で、機能主義の次の時代へ向かうためにどのような対応をするべきであろうか。成熟都市へ向かう日本は、財産権を修正することで、新たな考えへと向かう必要があるのではと考えている。

イギリスやフランス、ドイツなど歴史文化のある街並みが残るヨーロッパでは、建物に対して厳しい制約やルールが定められており、その制約の考え方が「都市の姿をどうするか」を第一に考えられている。イタリアフィレンツェのチェントロ・ストリコ（歴史的都心地区：図8）を例にみると、都市の大半を占める紫、青緑、赤紫で示される場所・建物は、形態はもちろん、その用途までもが変更できないようになっている。

日本では、ヨーロッパのように街



図8. フィレンツェのチェントロ・ストリコ規制図（一軒単位で定めている）<sup>9)</sup>

並みや景観構成する建築を貴重な都市環境の中の共有財産であるという思想が根付いていない。ヨーロッパと日本を比べると、辿ってきた歴史や文化は全く違うが、日本なりの財産権を再考する必要がある。

### 6. 「まちづくり」の目標像

まちづくりを考える際に重要になることは、景観形成の目標像を設計することである。まちをどんな景観にしたいか、道路沿いはどんな装いにするか、庭はどんなふうにするかなど、具体的な目標像の設定が必要である。また、都市計画など、マクロな視点からの設計や制度から都市を創造することも必要だが、地域住民から発せられる声や発想を取り入れる必要もある。

地域の目標像の実現に向けて住民が主体となって活動することも重要である。これまでの日本の都市計画では、変化を求めるエンтроピーが増えるような方法でまちづくりを行ってきたが、これからは、日々の活動から少しずつ目標像に近づいていくような、エンтроピーが減少するように秩序立てて行うまちづくりが求められる。

### ○都市計画と建築計画のニッチ

日本では都市計画と建築計画が別の分野として考えられ、都市計画家は建築設計はできず、建築家は都市の事を知らないような現状があった。このニッチを埋めるべく、都市計画を考えた建築設計、建築を考えた都市計画が必要になってくる。

### 7. 都市のデザイン

現在、都市のデザインは人口の多い都市を対象として行われてきたが、歴史的にみると、人口の少ない地域でも、都市レベルでの考察があったことが分かる。

図9、10は、比叡山の麓の大阪市坂本の古地図と実測図である。図9の古絵図は碁盤の目状に描かれ、それぞれの主要な道は東照宮や延暦寺への道である。図10の実測の地図を見ると、等高線に沿った道と等高線に直行した道は必ずしも碁盤の目を形成していない。昔の人は、湖を望むことのできる道と、山に沿った平坦な道について、山と湖が平行に配置されていると認識し、このような位置図を描いていた。図9にある垂直な2本の道に共通したデザインが見られることから、言わばイメージマップとして都市デザインを意識していたことが伺える。

日本のまちは一見都市デザインとして成立していないように見える矛盾が多く見られるが、矛盾を持ち込んで、尚且つ都市デザインをしているという見方をすると、都市デザインが浮かび上がってくる。規模の小さい都市でも、空間構成の原理やデザインを読み取り生かしていく

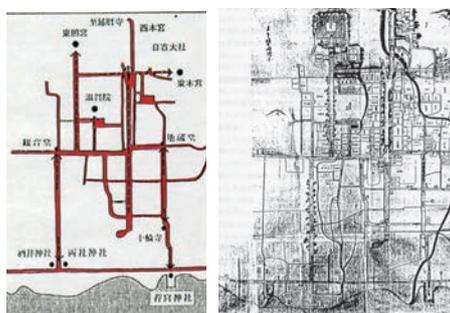


図9. 坂本の古地図に描かれた道<sup>10)</sup>

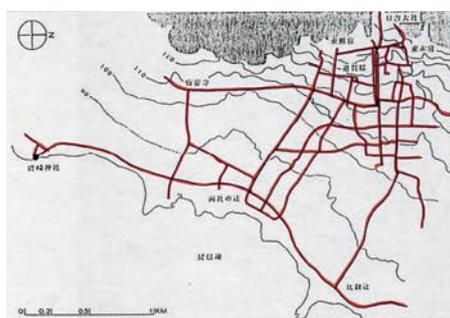


図10. 上の図の実測図上の復元

ことが一つの都市計画の手法になるのではないかと考えている。

## 8. 街並みの美の原理

### ○多様の統一原理

「統一する」という言語がよく用いられるが、群を構成する要素である、建築の高さや大きさ、色や形などに変化の幅を制限したうえで、自由に計画できるようにすることで、多様性がありながらも秩序のある街並みが生まれる(図11)。

### ○都市景観の図と地

街の中で図として浮かび上がってくるものも、違う視点から見たときに地となるような建物にするとよい。図12はフィレンツェのウフィツィ宮殿である。遠景で見ると街並みに溶け込むが、目の前に立つとその存在感を主張している。

### ○風情のデザイン

日本人にとって、風情はこころの有様であり、こころの有様は形の有様でもある。街並みに対するこころを建築で表現すると、季節感や雰囲気のある、風情のある街並みが出来るのである(図13)。

## 9. おわりに

時間・空間コンテクスチャリズムの手法を使って機能主義から脱却



図11. 多様性と統一感のある街並み(コペンハーゲン)<sup>11)</sup>



図12. ウフィツィ宮殿(上:遠景/下:近景)<sup>12)</sup>



図13. 季節の風情が感じられる街並み(手前)と、感じさせない奥のビル群<sup>13)</sup>

し、財産権を再考することで仕組みを整え、都市計画と建築計画のニッチを埋めることで、新たな都市像を創造する。多様性や風情のある街並みの原理を把握して設計する。これらの考え方が一体となることで、日本は次の時代の成熟した都市へと向かうことが出来ると考えている。

### 出典

- 1) ヨーロッパの近代都市と芸術 1870-1996: 東京都・東京ルネッサンス推進委員会, 東京都現代美術館, 国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術センター, 1996.
- 2) 日端康夫・日笠端: 都市計画, 共立出版, 1977.
- 3) 4) 11) 12) 13) 撮影: 山崎正史
- 5) 6) 日端康夫・日笠端: 都市計画, 共立出版, 1977.
- 7) L・ベネヴォロ, 横山正訳: 近代都市計画の起源, 鹿島出版会, 1976.
- 8) 吉田鋼市: トニ・ガルニエ, 鹿島出版会, 1993.
- 9) Piano Regolatore Generale Quaderno N.4, Comune di Firenze, 1992.
- 10) 『坂本 町なみ調査報告』 大阪市教育委員会, 1980.

発行: 2014年3月

### 『機能主義都市からの脱却に向けて —時間・空間コンテクスチャリズム—』

レクチャー: 山崎 正史 (立命館大学 理工学部 特任教授)  
記録・作成: 芦田 康太郎 (関西大学大学院 博士前期課程)  
宮崎 篤徳 (関西大学 先端科学技術推進機構)

(講演: 2013年9月27日)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度~平成27年度)」によって作成された。

関西大学  
先端科学技術推進機構 地域再生センター  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号  
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室  
Tel : 06-6368-1111 (内線: 6720)  
URL : <http://ksdp.jpimdo.com/>